

# 自然保護と開発

米司綾逸

「豊北原生花園」この名前が正式の名称であるかどうか、又それがいつから誰によつてそう呼ばれるようになったか、私には定かではない。

歴史的事実として調べる機会があれば、ぜひ知りたいとは思つてゐる。しかし現在の豊北海岸を見る限り、原生花園と称するものが存在するとはとても思えない。

私の知る限りでは、昭和30年代までは原生花園と呼ぶにふさわしい形が保持されていたようである。海岸に連なる一帯は、耕作には不適であつても、放牧地としては使える事を知つてゐた開拓者達はそこに囲いをつくり長い間利用してゐた。ハマナス、フレップ、ガンコウラン等の繁茂する中を家畜は自由に歩き回っていた。彼らは放牧地の中を自由に歩き野草を食べるのであるが、けつしてハマナス等を食べようとはしなかつた。それどころか、雑草退治もさることながら、小さな起伏などは、自然にくずれてしまい、人が歩いたり、所によつては車の通行も可能だったという。もし当時の状態が現在も保持されていたなら、浦幌・豊頃両町にとつて、原生花園はすばらしい観光資源となつていたのではないだろうか。

それでは、豊北海岸の自然破壊はいつからはじまったのだろうか。

こんな事を言うと行政機関の方々からお叱りを受けるかもしれないが、どうも自然保護行政のやり方に問題の発端があつたように思われる。昭和30年代に始まつた海岸一帯の砂防林の植林。この事業により海岸まで自由に往来のできた家畜は、結果的に海岸に押し出される事になつてしまつた。つまり砂の飛散を防ぐために、無償の雑草処理者を海岸から排除してしまつたのである。

次に気が付くことは、ハマナス等の保護植物を囲いの中に隔離する事により、益々管理者の手から遠ざけてしまった事である。

この二つの点だけをみても、自然保護という事の根本的なむずかしさを知る事が出来る。行政当局が形式的な事業に終らず、現状をもっと把握し

ていたなら、他の対策を構ずる事も可能だったと思われる。自然保護の本質とは、自然を現状のまま、おさえ込む事ではなく、自然すべてとの共存と考えるべきではないだろうか。

簡単に言つてしまえば、自然のなすがままにしておくのが最良の形なのかも知れない。

しかし、それは、あくまでも、自然のままの姿であり続ける事が条件であり、現在の様に、人間の介入がなされてしまった今、何らかの形で保護を考えなくてはなるまい。

保護という言葉を叫ぶのははたやすい。三日坊主的行動も又しかりである。自然保護という事を一度でも考えた事のある人がいるなら、一度豊北の海岸を見ていただきたい。そして何か行動をおこしていただきたい。どんなささいな事でも、長く続けられる位のベースで。

確かな情報ではないが、豊北原生花園に隣接するトイツキ原生花園の保護指定区域が一部解除されたという。なるほど、立入禁止の看板はその目的すら果たさなくなつてゐるし、囲いは、あちこちで杭が倒れている。それどころか、美觀をそこねる要因とさえ思えるのである。美しい自然を保護するための事業も、管理しだいではどうなるのかという、良い見本である。

このまま放つておけば、ハマナス等の根絶する日も遠くはないのではと想像するのは私だけではないだろう。そして路線の決定が気になる国道336号線と現在の自然保護団体の限度なき反対運動を結びつけて考へてしまうのは、考えすぎだらうか。

自然の存在を自分勝手に考えがちな今日、私達はどのような形で自然と対応すればよいのだろうか。日常生活の中では人工の物と接する事が多くなつた今日、あえて自然とのかかわりについて考える人は少ないだろう。しかし我々が人工の物と思っているのはすべて自然界に存在したものを、人間が、科学と称するものによって掘り出され、削られ、言うなれば人間によつて死んでしまつた

自然である。その中に住む人間がある時突然、自然を恋しく思う時があってもおかしくはない。

むしろ、生命を持った自然から遠去かった人間ほど自然に郷愁を感じるのではないだろうか。ところがやつと巡り会った自然との接し方を忘れてしまった仲間が多い事に失望せざるを得ないのは非常に残念である。

私の知る浦幌は、少なくとも第一次産業の町である。今後もその形態に大きな変化は起きないであろう。しかし周囲を見わたしそんなのんきな事も言ってはいられない。いまから、周囲のペースに追いつき、一步前に出ようとするならば、現在の産業との関連産業の育成と同時に、新しい形の産業とも言える観光産業を考えられないだろうか。

働く事を生きがいを感じていた世代から、生活を楽しむという思考の広がりつつある今日、物資的な安心と同時に精神的な安心感を必要としているのではないだろうか。物質的な面は、いつどこにいても満たされるであろうが、精神的な部分というのは非常にむずかしい。しかしその内一つには、自然との対話という事が必ず含まれるという事は、誰も否定出来ない事実であると確信する。

観光地化が進むにつれて、観光公害の問題が、取りざたされるかもしれないが、現状を考えると、自然保护と観光開発は併行に考えてもよい時代に来ているのではないだろうか。

人口が増加するという事は、都市にそのほとんどが集中するという事になろう。そして当然のごとく自然を求めるようになる。彼らにとって自然とはどういう物なのかと言えば、何の規制もない自由な所である。何物にも束縛されない事を自然だと考えるのは大きなまちがいで、自然の中にだけ込むというのがどういう事なのかを知る人は、少ないと思う。

自然との調和を取りきれなかったからこそ、文明というものが生まれ、人間が住みやすいように勝手に改造してきたのではないだろうか。それに気付かないまま、自然に入り込んで行ったなら、必然的に自然は死に直面するだろう。そうなつてから自然保护を訴えてもおそいのである。自然は保護される事より、すべての生物と共に存する事を望んでいると思う。

「自分くらいは」「回りがそうだから」という

考え方をもつ人は多い。ところがこの事は、悪い面に現われる事が多いのは残念である。その証拠に豊北海岸に向かう道路には、あきかんが落ちているし、海岸には、盗掘の跡やゴミが散在している。何ともさみしい話である。

それではこの現象を、逆手には取れないだろうか。豊北海岸は、いつもうつくしい、それどころか、夏になると花が咲きほこり人々の目を楽しませてくれる。ここに来るすべての人々に安らぎを与えてくれるような環境作りが出来たらすばらしい事だと思う。そして豊北海岸に行く事をほこりに思う人々が増えてくれれば、その時こそ、咲きほこるハマナスは、さらに美しく光り輝やくのではないか。

回りを見渡して、ハマナスの自生する原生花園というのは非常に少ない、そしてその少ない自生地が私達のすぐ身近にあるという事をもう一度よく考えてみる必要がありはしないだろうか。

(農業)

**訂正とお詫び** 前号、松谷暁子「十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について」中に次のように誤植がありましたのでお詫びして訂正します。

P 6 右 20行目 赤稗檜→赤稗櫟

右 36行目 赤稗檜→赤稗櫟

P 8 図版II 苞頭→苞穎

赤稗檜→赤稗櫟

蒙古白キビ→蒙古白

P 10 図版IV ギビ→キビ

P 12 右 3行目 イネ化→イネ科

P 13 左 11行目 2 Q→20

右 (6)と(8)の文献、ページの前に『東京大学理学部紀要』V-3を入れる。

1981年3月10日 印刷

1981年3月20日 発行

編集後藤秀彦

発行責任者家村克行

発行所浦幌町郷土博物館 (089-56)

北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地

印刷所大同出版紙業株式会社 (080)

北海道帯広市西7条南6丁目